

広報

ぼし

# キラキラ☆たまみず

平成25年4月20日  
第19号

発行 [玉水まちづくり協議会]

発行責任者：会長 佐古田 直實  
連絡先：☎・Fax (079) 506-3163

## さようなら 城北小学校

3月末をもって、「城北小学校」が閉校となりました。

その閉校に先立ち、2月16日（土）に「城北小学校・閉校記念コンサート」が行われました。

最初に、玉水童謡唱歌の会の方々による「城北小運動会の歌」や「篠山地方の子守唄」の歌唱、ちそく谷合奏団の方々による「わたしのお気に入り」や「ラストダンスはわたしに」の演奏を楽しみました。



休憩時間には、寺内にお住まいの尾川 五郎さんが「黒豆ポン菓子」を作つて下さり、子どもたちや参加者にふるまわれました。ちなみに、今回使われた黒豆は、3年生の子どもたちが社会科の学習の一環として栽培したものだそうです。

機械のそばで見ていた子どもたちは、ポン菓子が出来上がるときのあの大きな音に驚いていました。

お菓子は、コンサートが終わつてからいただきました。

その後、「ちめいど」のお二人によるコンサートが行われました。「ちめいど」は篠山市出身の兄弟デュオで、各地でプロ活動を展開されています。演奏のモットーを『生きることのすばらしさ、生命の大切さを歌う』ことにおいておられ、さわやかな歌声に楽しいひとときを過ごすことができました。



最後に、城北小学校の子どもたちによる呼びかけや、城北小学校をしのんで6年生が作詞した「閉校記念ソング『かわらないもの』」の歌唱がありました。その『かわらないもの』の歌詞の中に、

いつでも変わらずあたたかく 見守ってくれる  
夢が 始まる 今ここに 大切な大好きふるさと  
がありました。

その歌を聞きながら、子どもたちの健やかな成長を願うとともに、ふるさと「城北」を大切に守っていかなければとあらためて考えさせられました。



[ちめいどのお二人による演奏です。]

2月の閉校記念コンサートに続いて、3月24日（日）の午後、

## 「城北小学校閉校式」が行われました。



式典に先立ち、映像で城北小学校139年の歩みを振り返りました。なつかしい木造校舎や戦争当時の様子、鉄筋校舎に立ち変わったときの感激など、そのときそのときの子どもたちだけでなく保護者や地域住民の方々の城北小学校に寄せる思いが伝わってきました

酒井篠山市長さんや畠中教育委員長さんのあいさつの後、川端城北小学校長さんのお話がありました。

[川端城北小学校長によるあいさつ]

3月末の閉校に向けて、学校行事はもちろんのこと、各クラスでも学年に応じた活動が行われたことの報告がありました。特に、6年生は閉校と卒業のふたつの大きな取り組みを成し遂げ、寂しさの中にも満足げな様子を見せていました。



続いて、児童代表から校長先生、そして、教育委員会へと校旗が返納され、参加者全員で校歌を歌って終わりました。

城北小学校は139年の歴史を閉じましたが、4月からは「**城北畠中小学校**」として新しいスタートを切ります。今後の、子どもたちのさらなる成長と活躍を願っています。

## [お知らせ]

5月11日（土）午後7時30分より、玉水会館で、

平成25年度 「玉水まちづくり協議会」総会が行われます。

平成24年度の活動報告並びに決算報告と平成25年度の活動計画並びに会計予算について話し合います。城北地区にお住まいの方なら誰でも参加できますので、まちづくり協議会の活動に関心のある方は、ぜひともご参加下さい。

## 淡路の長沢地区への視察研修旅行

3月16日（土）に、淡路島の長沢地区へ視察研修に行ってきました。視察内容は、「コミュニティバスの運行について」です。

この地区は、棚田に囲まれた山間地域で、高齢化率も大変高いそうです。そのため、通学や通院、買い物などの交通手段に困り、地区住民が一致団結して市に掛け合って、何とかコミュニティバスの運行にこぎつ

けました。



【コミュニティバスの運行について説明を聞きました。】



城北地区にも藤岡谷や知足谷があり、早晚、長沢地区のようなコミュニティバスの運行が必要になるかも知れません。そのための準備を、まちづくり協議会では今から進めていきたいと考えています。

### [サークル紹介] 玉水童謡唱歌の会

城北地区の方々が集まって、活動されています。メンバーは現在27人で、誰もが食事より歌うことが大好きだそうです。練習は毎月1回で、第3月曜日の午後7時より、玉水会館で行っています。声を出すことは、健康にとてもいいそうです。

団員を募集していますので、いつでものぞいてみて下さい。



【閉校記念コンサートでの演奏風景】

## [地区紹介・丸山]

丸山は、多紀連山三岳の山麓に向かう細い谷筋の最奥に位置する、5所帯19名が暮らす小さな集落です。

集落の形成は、安永年間（1772～1781年）に篠山藩主「青山 忠高」が藩領の旱災を憂い築かれた「葆沢池」の水守として、山向かいの奥畠より移住してきたのが始まりとされています。このため行政区は畠村に属し、菩提寺、氏神も同じ谷筋の



[美しい農山村風景が残る丸山地区]



[里山整備等の活動で訪れた

知足、鷺尾と異なっています。子どもたちは、畠小学校まで山越えの道を通ってきました。昭和30年、1町4村合併による篠山町（旧篠山町）誕生を契機に学区が変更され、城北小学校に編入された後、城北地区の仲間入りをさせて頂いています。昭和30年代頃には9所帯50余名が暮らし、子どもたちの元気な声が聞かれたのですが、時代の移り変わりとともに過疎化が進み、児童・生徒も途絶え、集落維持が困難な状況に陥ってきました。

### 大学生によるワークショップ】

集落存亡の危機に直面しつつも、集落活性化の具体策も見出せず、月日を重ねていたところ、平成21年4月に開催された「丹波篠山築城400年祭」をきっかけに、行政や外部の多くの有識者・支援者のお力添えをいただき、今も農村の暮らしの佇まいを色濃く残し、農の文化が息づく集落景観を活かした集落の再生・活性化をめざした取り組みを始めています。



[満々と水をたくわえた葆沢池]

### 【ベトナムとの交流活動のもちつき大会】

(社)ノオトと有限責任事業組合（LLP）を組織し共同運営する「空き家を活用した農家民泊事業」を柱に、空き家や空き地、空き農地（耕作放棄地や荒廃した山林等）などの「負の遺産」の価値を再評価し、「地域資源」として再生し、活用するいろいろな事業を試行しています。資金力の無い小さな集落の取り組みですが、支援者のお力添えを裏切らず挑戦する覚悟です。（文責：佐古田 直實）